

2019年8月11日 日本基督教団 八ヶ岳伝道所 主日礼拝 NO.1080

聖書 イザヤ書 32:15~17/エフェソの信徒への手紙 2:14~18

説教 『崩される隔ての壁』

「実に、キリストはわたしたちの平和である(エフェソ 2:14)。平和とは「二つのものを一つにし(2:14)、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げる(2:15)」こと。そして「十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させる(2:16)」のだと。

この「二つのもの=両者」とは何であろうか。エフェソ教会内で対立していた、異邦人キリスト者とユダヤ人キリスト者のことらしい(2:11,15)。

短期間だがバンコクの日本語教会で働いた。「超教派」を標榜していたが、教会運営に前向きな信徒ほど教派の違いに過敏で、自教会の礼拝や讃美の仕方を要求し、聖書の読み方にも傾きがあった。「何をそんなに」と思うのだが、異国に暮らす寄る辺なさからか馴染んだものにかついていたようだ。

共同体内の対立と戦争では大分距離があるが、根っこはつながっている。その根からの妄想で間歇的に集団虐殺も起こる。

それにしても教会員同士の「敵意(2:16)」とは穏やかではない。それではその敵意は、いったい何から生ずるのか。異なる慣習や価値観への無理解か、利害に関わる何かか、または異質なものの嫌悪か。それぞれに当たっているだろう。そしてその根っこには、おしなべて他者への「恐れ」があるのではないか。そうした潜在的な恐怖が働いて「隔ての壁(2:14)」を作る。

「キリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現する(2:15)。「平和」の実現とは、恐れを土台にした「隔ての壁」が取り壊され、キリストにおいて「一人の新しい人」、すなわち「教会」が造られること。

崩れた壁跡に造られる教会とは何か。狭義の定義では、洗礼を受けた者たちの「閉じられた」共同体だが、実際の姿はいっそう多様で、その縁は波打ち際のように。

八ヶ岳伝道所の姿を思い巡らせよう。教会行事の他にも、礼拝堂や集会所でさまざまな活動が行われている。凝視すると掴み損ねてしまうのだが、ぼんやり眺めるとこれらも教会の姿のように感じられる。キリストによって恐れと隔ての壁が取り去られた「一人の新しい人」のように思われる。

どのようにして、隔ての壁が取り壊され、敵意が滅ぼされるのか、エフェソ教会の実際を自らの事として覚えておきたい。

キリストが「御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊した(2:14)」。イエスの「肉」すなわち十字架を通して、十字架によって私たちは「一つの体」となっていく(2:16)。

高い刑務所の塀も、低い正木の垣根も、隣人または自己への障壁も、隔ての壁に他ならない。あらゆる隔ての壁を見つめてみよう。そこには十字架が建てられている。十字架につけられたキリストがおられる。

あなたと私、私と私を隔てる壁に、今まさに十字架が建てられ、「わたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて御父に近づく(2:18)」。一つの霊に結ばれて(2:18)、一つの体(2:16)たる教会が現れる。

「正義が造り出すものは平和であり、正義が生み出すもの、とこしえに安らかな信頼である(イザヤ 32:17)」。誰も各々に義を主張するが、逆に見ればよい。「平和」こそ義であり、「安らかな信頼」こそ御心だ。

義はどう実現するのか。「霊が高い天から注がれる(32:15)」十字架によって、「荒れ野は園となり、園は森と見なされる(33:15)」。そこに「正義が住まう(32:16)」。戦争には、いかなる義もない。



《おまけのひとこと》

隔ての壁が崩され 弱さが曝されることの素朴な恐れ 弱い個体がいじめられて淘汰される鶏のような自然 十字架は強者の淘汰を赦さない不自然力 私たちは自然でありつつ不自然を生きている